

博士問題とマードック先生と余

夏目漱石

青空文庫

上

余が博士に推薦されたという報知が新聞紙上で世間に伝えられたとき、余を知る人のうちあるものの或者は特に書を寄せて余の栄選を祝した。余が博士を辞退した手紙が同じく新聞紙上で発表されたときもまた余は故旧こきゅうしんち新知もしくは未知の或あるものからわざわざ賛成同情の意義に富んだ書状を幾いくつう通も受取った。伊予いよにいる一旧友は余が学位を授与されたという通信を読んで賀状を書こうと思つていた所に、辞退の報知を聞いて今度は辞退の方を目め出たと思つたそうである。貰もらつても辞してもどつちにしても賀すべき事だというのがこの友の感想であるとかいつて来た。そうかと思うと悪戯いたづら好の社友は、余が辞退したのを承知の上で、故ことさらに余を厭がらせるために、夏目文学博士殿と上書うわがきをした手紙を寄こした。この手紙の内容は御退院を祝すというだけなんだから一いちぎよう行で用が足りている。従つて夏目文学博士殿と宛名を書く方が本文よりも少し手数てすうが掛つた訳である。

しかし凡すべてこれらの手紙は受取る前から予期していなかったと同時に、受取つてもそれほど意外とも感じなかったものばかりである。ただ旧師マードック先生から同じくこの事

件について突然封書が届いた時だけは全く驚ろかされた。

マードック先生とは二十年前に分れたぎり顔を合せた事もなければ信書の往復をした事もない。全くの疎遠そえんで今日まで打ち過ぎたのである。けれどもその当時は毎週五、六時間必ず先生の教場へ出て英語や歴史の授業を受けたばかりでなく、時々私宅まで押し懸けて行つて話を聞いた位親しかったのである。

先生はもと母国の大学で希臘語ギリシャの教授をしておられた。それがあゝ事情のため断然英国を後にして単身日本へ来る氣になられたので、余よらの教授を受ける頃は、まだ日本化しない純然たる蘇スコットランド国語スコットランドを使つて講義やら説明やら談話やらを見境みさかいなく遣やられた。それがため同級生は悉く辟易へきえきの体で、ただ烟けむに捲まかれるのを生徒の分ぶんと心得ていた。先生もそれで平氣のように見えた。大方どうせこんな下らない事を教えているんだから、生徒なんかに分つても分らなくても構かまわないという氣だったのだらう。けれども先生の性質が如何にも淡泊たんぱくで丁寧ていねいで、立派な英国風の紳士と極端なボヘミアニズムを合併がつべいしたような特殊の人格を具えているのに敬服して教授上の苦情をいうものは一人もなかった。

先生の白襯ホワイトシャツ衣めつたを着た所は滅多に見る事が出来なかった。大抵は鼠色ねずみのフラネルに風呂敷ふろしきの切れ端はしのような襟飾ネクタイを結んで済すましておられた。しかもその風呂敷に似た襟ネクタイ

飾イが時々 胴チヨツキ着の胸から抜け出して風にひらひらするのを見受けた事があつた。高等学
校の教授が黒いガウンを着出したのはその頃からの事であるが、先生も当時は例の鼠色の
フラネルの上へ縐しゆす子か何かのガウンを法衣こつものように羽織はおつていられた。ガウンの袖口には黄
色い平打ひらうちの紐ひもが、ぐるりと縫い廻してあつた。これは装飾のためとも見られるし、また
は袖口を括くくる用意とも受取れた。ただし先生には全く両様の意義を失つた紐に過ぎなかつ
た。先生が教場で興きように乗じて自分の面白いと思う問題を講じ出すと、殆んどガウンも鼠の
襯衣シヤツも忘れてしまう。果はてはわがいる所が教場であるという事さえ忘れるらしかった。こん
な時には大股おおまたで教壇を下りて余らの前へ髭ひげだらけの顔を持つてくる。もし余らの前に欠
席者でもあつて、一脚の机が空あいていれば、必ずその上へ腰を掛ける。そうして例のガウ
ンの袖口に着いている黄色い紐を引張つて、一尺程の長さを拵こしらえて置いて、それでぴし
やりぴしやりと机の上を敲たたいたものである。

当時余はほんの小供こどもであつたから、先生の学殖がくしよくとか造詣ぞうけいとかを批判する力はまる
でなかった。第一先生の使う言葉からが余自身の英語とは頗すこぶる縁の遠いものであつた。そ
れでも余は他の同級生よりも比較的熱心な英語の研究者であつたから、分らないながらも
出来得る限りの耳と頭を整理して先生の前へ出た。時には先生の家うちまでも出掛けた。先生

の家は先生のフライングの襦袢と先生の帽子——先生はくしゃくしゃになった中折帽に自分勝手に変な鉢巻を巻き付けて被っていた事があった。——凡てこれら先生の服装に調和するほどに、先生の生活は単純なものであるらしかった。

中

その頃の余は西洋の礼式というものを殆んど心得なかったから、訪問時間などという觀念を少しも挟さむ氣兼ねしに、時ならず先生を襲う不作法を敢てして憚からなかった。ある日朝早く行くと、先生は丁度朝食を認めている最中であつた。家が狭いためか、または余を別室に導く手数を省いたためか、先生は余を自分の食卓の前に坐らして、君はもう飯を食ったかと聞かれた。先生はその時卵のフライを食っていた。なるほど西洋人というものはこんなものを朝食うのかと思つて、余はひたすら食事の進行を眺めていた。実は今考えるとその時まで卵のフライというものを味わった事がないような気がする。卵のフライという言葉もそれからずっと後に覚えたように思われる。

先生はやがて肉刀と肉匙を中途で置いた。そうして椅子を立ち上がって、書棚の中か

ら黒い表紙の小形の本を出して、そのうちの或^{ある}頁^{ページ}を朗々と読み始めた。しばらくすると、本を伏^ふせてどうだと聞かれた。正直の所余には一^{ひと}言^{こと}も解らなかつたから、一体それは英語ですかと聞いた。すると先生は天来の滑稽を不用意に感得したように憚^{はば}りなく笑い出した。そうしてこれは希^{ギリ}臘^{シヤ}の詩だと答えられた。英国の表^{エキスプレッション}現^現に、珍^{ちん}紛^{ぶん}漢^{かん}の事を、それは希臘語さというのがある。希臘語は彼^{かの}地^ちでもそれ位^む六^むずかしい物にしてあるのだらう。高等学校生徒の余などに解るはずは無論ない。それを何^な故^ぜ先生が読んで聞かせたのかというと、詳しい理由は今思い出せないが、何でも希臘の文学を推^{すい}称^{しょう}した揚^あ句^{げく}の事ではなかつたかと思う。とにかく先生はそういう性^た質^ちの人なのである。

先生の作つた「日本におけるドン・ジュアンの孫」という長詩も慥^たか聞かされたように思う。けれどもそのうちの或^{ある}行^{ぎょう}にアラス、アラック、という感投詞が二つ続いていたと記憶するだけで、あとはまるで忘れてしまった。

ベインの『論理学』を読めといつて先生が貸してくれた事もあつた。余はそれを通読するつもりで宅^{うち}へ持つて歸つたが、何^{なに}分^{ぶん}課業その他が忙がしいので段々延び延びになつて、何時^{いつ}まで立つても目的を果し得なかつた。ほど経て先生が、久しい前^{ぜん}君に貸したベインの本は僕の先生の著作だから保存して置きたいから、もし読んでしまったなら返してくれと

いわれた。その本は大分丹念たんねんに使用したものと見えて裏表うらおもてとも表紙が千切ちぎれていた。それを借りたときにも返した時にも、先生は哲学の方の素養もあるのかと考えて、小供こどもころうや心に羨うらやまましかった。

あるときどんな英語の本を読んだら宜よかろうという余の間に応じて、先生は早速さつそく手近にある紙片に、十種ほどの書目しよもくを認めて余に与えられた。余は時を移さずその内の或物を読んだ。即座に手に入らなかったものは、機会を求めて得る度たびにこれを読んだ。どうしても眼に触れなかったものは、倫敦ロンドンへ行つたとき買つて読んだ。先生の書いてくれた紙片が、余の袂たもとに落ちてから、約十年の後に余は始めて先生の挙げた凡すべてを読む事が出来たのである。先生はあの紙片にそれほどの重きを置いていなかったのだろう。凡てを読んでからまた十年も経つた今日から見れば、それほど先生の紙片に重きを置いた余の方でも可笑おかしい気がする。

外国から帰つた当時、先生のお消息を人伝ひとづてに聞いて、先生は今鹿児島鹿児島の高等学校に相変らず英語を教えているという事が分つた。鹿児島から人が出てくる度に余はマードックさんはどうしたと尋ねない事はなかった。けれども音信はその後二人の間に全く絶えていたのである。ただ余が先生について得た最後の報知は、先生がとうとう学校をやめてしまつ

て、市外の高台たかだいに居きよを卜ぼくしつつ、果樹さいばいの栽培かいばいに余念よねんがないらしいという事であつた。先生は「日本における英国の隠者いんじや」というような高こう尚しょうな生活を送っているらしく思われた。博士問題に関して突然余の手元に届いた一封の書翰は、実にこの隠者が二十余年の無音ぶいんを破る価ありと信じて、とくに余のために認したためてくれたものと見える。

下

手紙には日常の談話と異ことならない程度の平易な英語で、真率まじめに余の学位辞退を喜むこぶ旨ねが書いてあつた。その内に、今回の事は君がモラル・バックボーンを有している証拠になるから目出めでたいという句が見えた。モラル・バックボーンという何でもない英語を翻訳すると、徳義的脊髓おもむきという新奇でかつ趣おもむきのある字面じづらが出来る。余の行為がこの有用な新熟語に価するかどうかは、先生の見識に任せて置くつもりである。（余自身はそれほど新らしい脊髓がなくても、便宜なしに誰にでも出来る所作しよさだと思ふけれども）

先生はまたグラッドストーンやカーライルやスペンサーの名を引用して、君の御仲間も大分あるといわれた。これには恐縮した。余が博士を辞する時に、これら前ぜん人の先例は、

毫^{ごう}も余が脳裏^{のうり}に閃^{ひら}めかなかつたからである。——余が決断を促^うがす動機の一部をも形づくらなかつたからである。尤^{もつと}も先生がこれら知名の人の名を挙げたのは、辞任の必ずしも非礼でないという実証を余に紹介されたまでで、これら知名の人を余に比較するためになかつたのは無論である。

先生いう、——われらが流俗以上に傑出しようと力^{つと}めるのは、人として当然である。けれどもわれらは社会に対する榮譽の貢献によつてのみ傑出すべきである。傑出を要求するの最上権利は、凡^{すべ}ての時に於いて、われらの人物如何^{いかん}とわれらの仕事如何によつてのみ決せらるべきである。

先生のこの主義を實行している事は、先生の日常生活を別にしても、その著作『日本歴史』^{あきろ うかが}において明かに窺^{うかが}う事が出来る。自白すれば余はまだこの標準^{スタンダード}的^{ウオーク}述作^{ウオーク}を読んでいないのである。それにもかかわらず、先生が十年の歳月と、十年の精力と、同じく十年の忍耐を傾け尽して、悉^{ことごと}くこれをこの一書の中に注ぎ込んだ過去の苦心談は、先生の愛弟子^{まなでし}やまがたいそお山県五十雄君から精^{くわ}しく聞いて知^{すべ}っている。先生は稿を起すに當つて、殆んどあらゆる言語で出版された日本に関する凡^{すべ}ての記事を讀破^{どくは}したという事である。山県君は第一その語学の力に驚ろいていた。和蘭語^{オランダ語}でも何でも自由に讀むといつて呆^{あき}れたような顔をして余

に語った。述作じゆつさくの際非常に頭を使う結果として、しまいには天を仰いで昏倒こんとう多時にわたる事があるので、奥さんが大変心配したという話も聞いた。そればかりではない、先生は単にこの著作を完成するために、日本語と漢字の研究まで積まれたのである。山県君は先生の技倆ぎりようを疑つて、六ずかしい漢字を先生に書かして見たら、旨くはないが、劃かくだけは間違なく立派に書いたといつて感心していた。これらの準備からなる先生の『日本歴史』は、悉く材料を第一の源みなもとから拾い集めて大成したもので、儲もつからない保証があると同時に、学者の良心に対して毫ごうも疚やましからぬ徳義的な著作であるのはいうまでもない。

「余は人間に能あたう限りの公平と無私とを念じて、榮譽ある君の国の歴史を今になお述作しつつある。従つて余の著書は一部人士じんしの不滿を招くかも知れない。けれどもそれはやむを得ない。ジョン・モーレーのいった通り何人なんびとにもあれ誠実を妨ぐるものは、人類進歩の活力を妨ぐると一般であつて、その真正なる日本の進歩は余の心を深くかつ真面目まじめに動かす題目に外ならぬからである。」

余は先生の人となりと先生の目的とを信じて、ここに先生の手紙の一節をありのままに訳出した。先生は新刊第三巻の冒頭ぼうとうにある緒論しよろんをとくに思慮しりよある日本人に見てもらいたいといわれる。先生から同書の寄贈を受ける日それを一読して満足な批評を書き得るな

らば、そうして先生の著書を天下に紹介する事が出来得るならば余の幸^{さいわい}である。先生の意は、学位を辞退した人間としての夏目なにがしに自分の著述を読んでもらって、同じく博士を辞退した人間としての夏目なにがしに、その著述を天下に紹介してもらいたいという所にあるのだろうと思うからである。

——明治四四、三、六——八『東京朝日新聞』——

青空文庫情報

底本：「漱石文明論集」岩波文庫、岩波書店

1986（昭和61）年10月16日第1刷発行

1998（平成10）年7月24日第26刷発行

入力：柴田卓治

校正：しず

1999年8月5日公開

2003年10月9日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

博士問題とマードック先生と余

夏目漱石

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>